

バスケットボールのドリブルに関するルールの変遷と その要因について

—創案から1960年代まで—

大川 信行¹

A Historical Study on the Transition of the Dribble Rules in Basketball

-From 1891 to 1960's-

Nobuyuki OKAWA

キーワード：バスケットボール, 歴史, ルール, ドリブル

Keywords : basketball, history, rule, dribble

1. はじめに

周知のように、スポーツにおける技術と戦術の発展はそのスポーツのルールと密接な関係がある。ルールが変更されれば、関連する技術や戦術も変わり、技術や戦術がそのスポーツの目的にそぐわない方向に進むと、ルールによって規制されるのである。

バスケットボールにおいても、この点は例外ではなく、なかでもドリブルは、初期の段階から問題視されていた技術であった。プレイヤーたちはゲームの普及とともに、少しでも自分たちに有利になるようルールの解釈を広げてゆき、多様なドリブルをおこなうのだが、それは次第にプレイの平等性をなくし、粗暴なプレイへと繋がるのであった。ドリブルに関するルールの大半は、これらを規制する目的で設けられたのだが、それはまた、新たなドリブルの技術を誕生させるきっかけとなり、いわゆる「いたちごっこ」の様相を呈しながら次第に淘汰されてきている。

ところで、こうしたバスケットボールのドリブルに関するルールを扱った先行研究として、管見の限りではトーマス・クヌッセン(Tomas A. Knudsen)¹⁾による論文をあげることができる。当該論文はその題名が示すように、男子アマチュア・ルールの一般的な変遷を扱ったもので、ルール史の観点からは秀逸であるが、その主眼はあくまでも年次ごとのルー

ルの変容にあるため、本研究のような要因まではあまり触れられてはいなかった。

そこで、本研究ではクヌッセンの論文を参考に、1960年代までのドリブルに関するルールの変遷を「スポルディング・オフィシャル・バスケット・ボール・ルール」(Spalding's Official Basket Ball Rules)を中心史料として再考するとともに、ルールの変容がもたらされた要因についても明らかにすることを目的とした。

なお、考察の対象を1960年代までに限定したのは、この時期までに今日とほぼ同じ基準がルール上で整備されたものと判断されたからである。

2. 創案から1904年までのドリブル・ルール

創案者であるジェイムズ・ネイスミス (James Naismith) が最初に作成した「13か条ルール」では、すでにドリブルへの門戸が開かれていたものと考えられる。それは当該ルールの条文のなかに、「2. ボールは片手もしくは両手で、どの方向にもたたくことができる (決して拳でおこなわない。)²⁾ と、ボールをたたくことを認めていたからである。しかも、彼は1892年に出版した最初の『ルールブック』のなかで、ドリブルについて次のようにも触れていた。

「・・・彼が走っている間、彼の前にあるボールをたたくか、もしくは彼の手で、床の上にそれをドリブルしてもよかった。しかし、彼は足でそ

¹⁾ 富山大学教育学部

れを蹴ることはできなかった。それをドリブルすることさえなかったのに・・・」³⁾ (傍点, 引用者)

引用から、ドリブルは実際にはおこなわれていなかったものの、彼の頭の中には、すでに何らかのドリブルのイメージがあったことが伺える。じつは、このことと関連してネイスミスは当初、ドリブルを守りの手段として考えていたようである。

「ドリブルは元々守りの手段であった。プレイヤーがかなり厳しくガードをされてボールを保持した時、彼はボールをチームメイトの誰かにパスすることができないので、彼ができるただ一つのこと、再びボールを取り戻すことができるかもしれないということで、自ら進んでボールの所有を放棄することであった。彼はその際、フロアにボールをバウンドさせるか、転がすかしていた。このバウンドか転がしが今日のドリブルの起源である。」⁴⁾

さらに、興味深いのは先の『ルールブック』のなかで、今日違反とされているエアードリブルのことについても述べられていたことである。

「プレイヤーはボールを取ったあと、走ることはできないけれども、ボールを投げ、それを再び取る努力をしてもよい。この意味は、彼がフィールドの一部から他のところへ前進してもよいということであるが、しかし、彼の相手はいつも、彼をタックルすることなしに、ボールを手に入れる機会を待っている。」⁵⁾

この文言は、翌 1893 年の第二版目の『ルールブック』では、「プレイヤーはボールをとった後、走ることはできないけれども、ボールを投げ、それを再び取る努力をしてもよいが、しかし、彼はボールを頭より高く投げなければならない。」⁶⁾ と加筆されている。おそらく、ボールをつまむ程度に投げて前進するケースがでてきて、相手にボールを奪う機会がほとんどなかったことから、このような新たな条文が付け加えられたものと思われる。

1896 - 97 年度になると、ドリブルをめぐる「解釈」は、質疑応答の形で「スポルディング・オフィシャル・バスケット・ボール・ガイド」(Spalding's Official

Basket Ball Guide) のなかに掲載されてくる。ここでは、ボールをバウンドさせる一連の動作を合法と認める回答がなされていた。

「No. 4. 質問—走っている間に、ボールを投げ下ろすか、バウンドさせて、その跳ね返りをキャッチすること（それによって生じる過程）は違反ではないのか。

答え—走っている間に、ボールをバウンドさせ、それをキャッチすることと、それによって生じる過程は違反ではない。」⁷⁾

また、エアードリブルに関してもネイスミスは、「アンパイア」と題した論説のなかで、以下のように説明している。

「手のひらの上でボールを投げることは、運ぶことである。しかし、もしボールが頭より高く投げられるなら、それは運ぶこととはみなされない。」⁸⁾

9 人制から 7 人制に変わり、さらに 5 人制ゲーム⁹⁾ の普及とともに、それまで守りの消極的な手段であったドリブルも、ボールを有効に進められる技術として積極的に活用されるようになってくる。なかでもボックス（ガード）のプレイヤーは、「フロアの端から端までボールをドリブルするか、もしくはバウンドさせることに熟達している」¹⁰⁾ ことが期待されていた。その際に使われた方法が両手ドリブルとダブル・ドリブル（ドリブルしてキャッチし、再びドリブルをすること）であった。しかし、こうしたプレイは独断専行になりやすく、往々にして粗暴になる傾向が強かったことも事実であった。

「ドリブル・ゲームは、オリジナル・ゲームの目的を多少変更した程度で発展してきている。…大きくて速く走れるプレイヤー、この意味は、相手が何をしようとも、絶対にゴールを試みて、成功させることができる人ということである。これは正当なドリブルではなく、大抵は両手を使い、そして粗暴の最たる原因である。このプレイを止める唯一の方法は、前面で捕まえて走りを止めることである。」¹¹⁾ (引用中のドリブル・ゲームについては注記を参照のこと)

このような状況のため、ルール委員会は1898 - 99年度のルールで、この種のドリブルに重要な制限を設ける改正をおこなっている。新しいルールでは、次のように規定された。

「ボールが両手でキャッチされ、フロアにバウンドされた時、そのボールは他のプレイヤーによって触れられるまで、同じプレイヤーが再びキャッチしてはならない。彼が選ぶ回数だけ片手でボールをたたくことは違反ではない。両手でドリブルしながらフィールドを進み、その後ゴールにスローすることは違反である。・・・」¹²⁾

両手ドリブルは反則とされたが、それでもドリブルに精通していた一部のプレイヤーたちは、エア・ドリブルやダブル・ドリブルなどを使って、なおも粗暴で支配的なプレイを続けていたのである。そのため、この頃になると、「パスを促進して、粗暴になるドリブルを取り除き、フロアを3つに区画して、ガードを一方のエンド側にとどめるべきである。」¹³⁾という提案さえなされている。

しかしながら、こうしたドリブルを規制する思い切った提案を当時のルール委員会は容認しなかったのである。けれども、ルール委員会もただ手をこまねいていたわけではなかった。1899 - 1900年度のルールでは、ダブル・ドリブルを規制するためのより詳細な規定をおこなっていたからである。

「プレイヤーは両手でボールに触れることができるが、一度だけである。それはこのドリブルの時だけに適用するもので、その他では両手の使用はできる。彼が両手でボールをキャッチし、その後片手でドリブルすることはできるが、誰か他の人がそれをプレイするまで、両手で再びボールに触れることはできない。もしくは彼は片手でボールを得て、片手でボールをドリブルし、その後両手でボールをつかみ、ボールを投げなければならない。片手でドリブルがされていれば、交互に手を使ってもよい。」¹⁴⁾

この規定により、両手でボールにキャッチできるのは、一連のプレイのなかで1回しかできなくなるはずであった。しかしながら、プレイヤーたちは別のある方法を思いついて、それを悪用し始めてきた

のである。それは当時のドリブルの「解釈」として、パスされたボールを両手でキャッチしようとしてファンブルしてしまった場合、たとえそのボールが前進しても、それはドリブルとみなされず、そのボールを再び両手で拾い上げることができたのである¹⁵⁾。これに目をつけたプレイヤーのなかには、わざとボールを自分が好きなおとこにたたいて、ファンブルしたように見せかけ、それを両手で拾い上げ、さらにドリブルをして、シュートまで繋げるというダブル・ドリブルをおこなってきたのである。

これに対して、ルール委員会は翌年に別の一手を講じてドリブラーによる単独プレイの抑制を図ったのである。

「ボールをドリブルしているプレイヤーは、他のプレイヤーによってボールがプレイされるまでゴールへのスローはできない。」¹⁶⁾

短い条文ではあるが、これがもたらした影響力は大きかった。それはこれまでドリブルからシュートまでを単独でおこなってきたプレイヤーの一番の見せ場を奪うことになったからである。ルール委員会はこの規定を設けた理由として、翌年の「スポルディング・オフィシャル・バスケットボール・ガイド」のなかで、「ドリブル後のゴールへのショットは個人技の発展であるが、バスケットボールの基本はチーム・プレイである。」¹⁷⁾と、これがドリブルを使った単独プレイへの戒めであったことを述べている。

さて、この頃になるとファンブルを悪用したダブル・ドリブルもかなり横行してきたようで、ルール委員会はその規制にも乗り出している。それは1903 - 04年度に、「1回のバウンドは、1回のドリブルである」¹⁸⁾と定め、ファンブルによるボールのバウンドさえもドリブルとしたのである。

これに対して、プレイヤーたちは仕方なく苦肉の策を講じている。それは1回のバウンド中に、できる限り走って距離をのばすというもので、ルール委員会はこのプレイについても、次のような規定でドリブルの定義を明確にし、その規制を図っていた。

「ドリブルとは、プレイヤーが片手もしくは両手で1回もしくはそれ以上、他のプレイヤーの手助けなしに、ボールをローリングもしくはバウン

ドさせて前進している間に2歩以上進むプレイのことである。両手のドリブルにおいては、1度より多く同時に使うことはできない。」¹⁹⁾

当該規定により、それまで曖昧であったドリブルとファンブルの定義が明確となり、実質上ダブル・ドリブルはおこなうことができなくなった。すでに規制されていた両手ドリブルとあわせると、ようやくドリブルの際の粗暴さが取り除かれたかにみえた。しかし、次節で述べるように、この問題はプレイヤーの安全という一面だけで解決できる問題ではなかったのである。すでにこの頃になると、バスケットボールはスペクテイター・スポーツとしての道を歩んでいたからである。

3. 1905年から1914年度までのドリブル・ルール

1905年に、大学がそれまでの組織(AAU)から独立したことで、1914年までの10年間は、2つの異なる団体がそれぞれのルールでゲームをおこなっていた²⁰⁾。また、この期間中、「AAU・YMCAルール」の方はドリブルに関する規定を一切変えず、そのままにとどめていた。したがって、この10年間におけるドリブル・ルールの変更はすべて「大学ルール」によるものである。

さて、1905 - 06年度における「大学ルール」でドリブルは以下のように規定され、それまでファウルとされてきた両手ドリブルとドリブラーによるシュートを許す規定となっている。

「ドリブルは、ボールが他のプレイヤーによって触れられる前に、プレイヤーが投げるか、たたか、バウンドさせるか、回転させることによって、ボールに推進力を与えた後に、片手あるいは両手で再び2度以上ボールに触れるプレイである。

注意—ゴールへの連続した試みはドリブルとみなさいものとする。」²¹⁾

引用から察すると、「大学ルール」委員会は、その発足からドリブルがもたらすゲームの興奮と魅力を認め、その活用に踏み切ったものと思われる。それはネイスミスが1909年にドリブルの効用として、「ドリブルの復活が、観衆とプレイヤーの興味を膨

らませ、特に大きなフロアでフェアなプレイヤーによるゲームは消極的な特徴を減らし、観衆とプレイヤーの両方にバスケットボールの楽しさを与えている。」²²⁾と述べていることから伺える。

しかしながら、このドリブルの過ぎた活用は、すでにみてきたように、それに付随して起こる粗暴さと1人のプレイヤーによるゲームの支配的状況を招き、それに対していかにルールで制限していくかという課題の取り組みをも意味していたのである。

その取り組みの最初が1908 - 09年度にみられる。この年に「大学ルール」委員会はようやく「合法とされるドリブルは、連続していなければならない」²³⁾と定め、ドリブラーが一度ドリブルを止めてしまうと、そのボールを放棄しなければならない規定に改正したのである。

そして、翌1909 - 10年度のルールでは、「ドリブルとは、ボールがたたかれるか、バウンドするか、投げられるか、または回転している間のボールの動きであると理解される。」²⁴⁾と新たに定義となる規定を追加し、その説明として初めてドリブラーの動きではなくて、ボールの動きに関して言及していた。

「新しいルールのもとでは、ボールの動きだけが考慮される。したがって、単にボールが動いている限りドリブルは合法である。ドリブルを止めると、プレイヤーは再びドリブルをしてはならず、すぐにパスをするか、またはゴールにスローしなければならない。」²⁵⁾

しかし、この時点ではまだ両手ドリブルは合法であり、一部のドリブラーによる粗暴で支配的なプレイは横行していたものと思われる。両手ドリブルに制限が設けられるようになるのは1911 - 12年度からのことで、以下のように規定されていた。

「・・・仮にボールがバウンドか、たたかれるか、トスカ、回転しているうちの運動で、その連続性を失い、片手で持たれるか、両手で触れた場合、そのドリブルは止められたものとする。」²⁶⁾

これにより、「大学ルール」でもようやく両手ドリブルが廃止され、「AAU・YMCAルール」に近い内容となったのである。

また、その翌年に「大学ルール」委員会は、「ド

リブルを使いボールを所有し続けることは、1人のプレイヤーによってゲームが支配されることには当たらない。」²⁷⁾とコメントしており、単独での片手による連続したドリブルを容認している。

そして、1913 - 14年度には、それまで規定されていなかったエアードリブルに関しても、「ボールは明確にたたかれるべきであり、ボールは1度だけ空中にたたくことができる」²⁸⁾として、1回だけのプレイを認めている。

このように、1905 - 06年度から1914 - 15年度までの10年間における「大学ルール」でのドリブルに関する規定は、エアードリブルの容認を除けば、今日とほぼ同じ内容になっていたことがわかる。

4. 1915年から1945年までのドリブル・ルール

1915年に発足した合同ルール委員会におけるルール（以下、「合同委員会ルール」と記す）でのドリブルに関する規定は、それまでの「大学ルール」のものが採用されている。すでに「AAU・YMCAルール」と「大学ルール」はかなり類似したものになってはいたが、両者が合併し、ルールに関しては「大学ルール」が採用されたことで、それまでの「AAU・YMCAルール」でおこなってきたチームにとっては、二つの変更を余儀なくされたことになる。

その第一は、ドリブラーがゴールへそのままシュートできたことであり、第二は、両手でボールに触れた後にドリブルをして、さらにドリブルを止めるのに再び両手でボールに触ることができたことである。この年度に記されたドリブルの規定は、以下のとおりであった。

「ドリブルは、プレイヤーが投げる、たたく、バウンドさせる、回転させるかして、ボールに推進力を与えた後に、他のプレイヤーに触れられる前に、再びボールに触れるプレイのことである。その用語としてのドリブルとは、ボールがたたかれるか、バウンドするか、投げられるか、または回転している間のボールの動きであると理解される。

注意—ゴールのための連続した試みは、ドリブルとみなされない。プレイヤーは、ドリブルの終了後にゴールを狙うことが許される。」²⁹⁾

1917 - 18年度になると、さらに新たな「解釈」が「スポルディング・オフィシャル・バスケットボール・ガイド」のなかでなされている。その内容は、「ボールの所有を試みている際に、ボールをファンブルしたり、ジャグリングした場合はドリブルとみなされ、ドリブルを開始することはできない。」³⁰⁾とするものであった。

17年前に、わざとファンブルしてボールを前進させ、そのボールを両手で拾い上げ、そこからドリブルを開始するという、ダブル・ドリブルが横行したが、これと同じ現象がおそらくこの時期にも現れたために、合同ルール委員会は上記のようなコメントを掲載したと思われる。

1924 - 25年度では、ドリブルに関する規定のなかに、次のような一文が追加された。

「ドリブル中もしくはドリブルの初めに、1回だけ空中にボールを打つか、トスすることを除き、ドリブルではボールがフロアに接触しなければならない。」³¹⁾

また、この年度と翌年度で身体接触に関するルール（パーソナル・コンタクト・ルール）が増補され、ドリブル中に起きる接触の弊害についても説明されている。1924 - 25年度のそれをみると、以下のとおりである。

「ドリブルで起こる身体接触は通常避けられ、起きたなら罰せられるべきである。時々、接触の責任がドリブラーにあるのか、それともディフェンス・プレイヤーにあるのか、判定し難い場合があるが、一般的には、もしディフェンス・プレイヤーが前から接近してきたなら、接触回避の責任は主にドリブラーにあり、もしディフェンス・プレイヤーがドリブラーの後ろから接近してきたなら、ディフェンス・プレイヤーは方向を変えるか、止まるべきである。・・・もし、両者とも接触に責任がある場合は、ダブル・ファウルを宣す。」³²⁾

1925 - 26年度になると、ドリブルに関するルールのコメントとして、さまざまな状況における責任の所在がより詳細に説明されるとともに、接触を避けるためのドリブラーの責任が強く主張された内容

となっていた。

「ドリブラーが突き進む際、彼らは時々、ディフェンスが反則することを期待して、身体の側面を相手に押し付けたり、肘打ちしたり、なかにはまっすぐ腕を伸ばして当てることさえする。ディフェンスは罰せられる不安から消極的になり、役に立たないことになってしまう……」

違法なドリブルやドリブルでボールとともに走るために起きる多くの反則による弊害は、どんな距離でも1回のバウンドに制限すべきであるという議論を促進させた。それはあまりにも根本的な変更となるので、急に試みることはできなかったが、考慮するには十分であった。ゲームに最も思慮深い何人かの学生は、このような変更賛成であった。」³³⁾

引用中にある「ドリブルを1回のバウンドに制限する」という要求は、さらに1926 - 27年度にも引き継がれていた。その要求には多くの賛同者がいたようで、合同ルール委員会委員長のオズワルド・タワー (Oswald Tower) の報告によれば、「それは最も根本的な変更であることを世論は同意していて、その変更を圧倒的に賛成しているように感じた。」³⁴⁾と述べている。

1927年4月、合同ルール委員会はゲームの土台を揺るがしかねない「1回バウンドのドリブル・ルール」への変更を決め、通達している。

これに対して、大学のコーチたちは合同ルール委員会のこの行動に対する抗議を集約するために会議を開催した³⁵⁾。ここで決議された大学コーチたちの抗議は、合同ルール委員会にこの問題を再考させることになり、1927年5月12日に合同委員会ルール委員長のL. W. セイント・ジョン (L. W. St. John) は、役員だけの特別会議を招集して、以下の決議を採択している。

「ルール委員会は、ドリブルの規制がバスケットボールの最高の面白さに必要な段階であると信じている。委員会はこのような変更を早期に実施することでコーチ、プレイヤー、オフィシャル、そしてゲームに関心のある人たちが直面する弊害を悟り、したがって1927年4月9日に出された予告は、1927 - 28年度シーズンの間延期するも

のである……」³⁶⁾

結局、「1回バウンドのドリブル・ルール」は履行されることなく、すぐさま撤回されたが、それでも1928年の合同ルール委員会で再び討論され、翌29年にもおこなわれていた。この問題が再三にわたり取り上げられてきた背景として、クヌッセンは合同ルール委員会の「実質的な何人かのコーチとオフィシャルが、ドリブルを制限することを主張しており、大多数のコーチたちはむしろ、接触が起きた時にドリブラーにより大きな責任を課す以外の変更を望んではいなかった。」³⁷⁾ことを指摘している。つまり、合同ルール委員会の一部の人間が、ドリブルに制限を加えることに熱心だったことにより、この問題は長く検討されることになってしまったというわけである。

しかし、それもその主眼点が次第にドリブルの制限から、多くのコーチが望んでいたドリブルによってもたらされる反則行為の責任所在へと移ったことで、この問題は立ち消えになったようである。それは1928 - 29年度の「ルールの解釈」のなかで、次のように述べられていることから伺える。

「ドリブルの制限を主張する人々のほとんどは、ドリブルがあまりにも使用されており、その使用に起因する多くの反則を十分に上げることが不可能であると考えている。前者はコーチの問題であり、後者は解決すべきルールおよびオフィシャルの問題である。ドリブルに起因する反則に関するドリブラーの責任を強調するために、新しいステートメントは、ルール15、セクション9を加える。もし、ドリブラーの進路がブロックされていて、彼がパスかシュートをするつもりで、相手との接触なしで合理的に通り返せる見込みがなければ、ドリブルをするべきではない。これは責任からディフェンス・プレイヤーを除くということではなく、接触を回避することは両者の義務である。しかし、従来よりも多くの注意がドリブラーの責任に向けられることになる。ドリブルを止めることを試みる際に、ディフェンス・プレイヤーはボールをプレイしなければならない。」³⁸⁾

引用にあるルール15、セクション9の規定をみても、「もし、ドリブラーが相手に突進するか、相

手と同時に身体接触が起きた場合、そのような接触を回避する明白な努力がなければ、パーソナル・ファウルの宣言はドリブラーにされる。」³⁹⁾と明らかにドリブルで起きる反則の責任の多くをドリブラーに課す内容となっていた。

これらの規定と「ルールの解釈」は、その後1934 - 35年度まで継続され、その翌年度の1935 - 36年度に改訂がされていた。新しいドリブルの定義としては、ファンブルなどをドリブルとみなさないというものであった。

「ボールをキャッチする際のファンブルもしくはボールのコントロールを得る試みは、ドリブルとみなさない。もし、プレイヤーが落球、ファンブルもしくはボールをタップしても、彼はその後ボールを取り戻し、ドリブルを開始できる。もし、ボールを突いている時に、そのプレイヤーがボールを前に進める試みを明らかにしているのなら、彼はドリブラーとみなされる。」⁴⁰⁾

また、この年度に加えられた規定として、「ボールがプレイヤーの手に触れていない時は、プレイヤーの歩数に制限はない。彼はドリブルのバウンドの間に何歩進んでもよい。」⁴¹⁾とされた。

これらの新しい規定と解釈は、すでにある程度一般的になっていたようであるが、ファンブルに関する解釈についてはまだ画一性に欠けるとして、いくつかのクレームがあったようである。それは、攻撃の終盤、特にゴールに背中を向けているプレイヤーが、1回バウンドさせながらターンをするピポット・プレイをドリブルとするのか、それともファンブルにするのかといった問題が残されていたからである。

1939 - 40年度になると、ドリブル中のボールの状態についての説明がより詳細に定義されてくる。それは、「バックコート・ルール」との関連で、ボールのコントロールに関する定義の確立が必要だったからである。そのバックコート・ルールとは次のとおりである。

「チームがバックコートでボールのコントロールを得た時、相手がボールに触れているか、もしくは触れていたかして、そのチームのコントロール外でない限り、チームは10秒以内にボールを

フロントコートまで進めなければならない。ボールがチームのコントロール外だった場合、新しいプレイは生じ、バックコートでボールのコントロールを取り戻した時に再び10秒間が始まる。」⁴²⁾

この規定を受けて、ドリブル中のボールの定義も、「ドリブルがされている時のボールはコントロール中であるが、しかし、ドリブラーの所有ではない。」⁴³⁾としている。つまり、プレイヤーがボールを保持している時のみ所有とされたのである。プレイヤーが味方にパスしたり、ドリブルをしている最中はコントロールであって、その終わりはゴールへのシュートであり、また相手によってボールの所有が確保された時となったのである。

この後10年間、ドリブルに関するルールは変更されておらず、1949 - 50年度に再び、それまでの繰り返しや不正確さを無くすための書き換えが行われていた。それは以下のとおりである。

「ドリブルとは、フロア上もしくはその空間でボールをタップするか、投げてコントロールしているプレイヤーによって引き起こされているボールの移動であり、ドリブルが終わるまでに1回または何回かボールに触れることである。ドリブルの終わりとは、ドリブラーが(a)同時に両手でボールに触れた時、(b)彼がボールに触れている間で、その動きが停止している時、(c)ゴールを試みている時、(d)さもなければコントロールを失った時か、ボールがデッドになった時である。

エア・ドリブルとは、ドリブルの1つで、ドリブラーが空中でボールをタップするか、投げるかして、ボールがフロアに触れる前に、ボールに触れることである。」⁴⁴⁾

この規定は、その内容がよく整理されたものであったためか、1969年までの20年間ほとんど変更されずにきていた。そして、この年度の改正でエア・ドリブルも削除され、これにより、ドリブルに関するルールはほぼ今日的になったとみられるのであった。

5. おわりに

これまで検討してきた事柄に、若干の所見を交え

てまとめると、以下のとおりである。

- 1) 創案当初において、ドリブラーへの規制がまっ
たくなかった頃は、両手による中断しながらの
ドリブルさえも認められており、ラフ・プレイ
や個人プレイの温床となっていた。そのため、
1900 - 01年度にドリブル後のシュートを禁止
するルールが制定された。その後、このルール
は1905 - 06年度に分岐した「大学ルール」で
撤回されていた。
- 2) 1909 - 10年度にはドリブルをボールの動きで
定義し、1911 - 12年度には両手で同時に触れ
た時点でドリブルを終了するとのルールを設
け、両手ドリブルを廃止した。しかし、ドリブ
ルはこうした制限にもかかわらず、依然として
ゲームを支配する手段であった。それはドリブ
ラーとその相手との間で接触が生じた場合、あ
らゆる面でドリブラーが有利になることが多
かったからである。
- 3) また、1915年から1927年にかけて、ドリブル
をワンバウンドに制限することが真剣に検討さ
れ、1927年にワンバウンドのドリブルしか認め
ないというルールが可決され、通達された。
これに対して、全米バスケットボール・コーチ
協会が非常に強い抗議をおこなったために、こ
の1回バウンド・ルールは履行されることなく、
すぐに撤廃された。以来、ドリブルのより
厳密な定義と接触回避のためのドリブラーの責
任が、以前よりまして問題視されるようになった。
- 4) 1940年代はドリブルに関するルールの変更は
されておらず、1949 - 50年度に再び、それま
での繰り返しや不正確さを無くすための書き換
えが行われ、さらに1969年までの20年間もほ
とんど変更されることはなかった。
- 5) そして、1969 - 70年度の改正で、エアー・ド
リブルも削除され、これによりドリブルに関す
るルールはほぼ今日的になったとみられるので
あった。

<注記及び引用・参考文献>

- 1) Knudson, Thomas A., "The Evolution of Men's
Amateur Basketball Rules and the Effect upon
the Game", Unpublished Doctor's dissertation,
Springfield College, 1972.

- 2) Naismith, James. "Basket Ball," The Triangle,
January 15, 1892, p.144-147.
- 3) Naismith, Jas. Rules for Basket Ball, Springfield,
Mass.: The Triangle Publishing Co., 1892, p.10.
- 4) Naismith, James. Basketball: Its Origin
Development, New York: Association Press,
1941, p.63-64.
- 5) Naismith, Jas. Rules for Basket Ball, op. cit.,
p.9-10.
- 6) _____ . Basket Ball Rules for 1893,
Springfield, Mass.: The Triangle Publishing Co.,
Springfield, Mass., 1893, p.14.
- 7) Gulick, Luther. (ed.). Spalding's Official
Basket Ball Guide, New York: American Sports
Publishing Company, 1896, p.23.
- 8) Naismith, James. "The Umpire," Spalding's
Official Basket Ball Guide, ed. Luther Gulick.
New York: American Sports Publishing
Company, 1896, p.16.
- 9) 創案当初は多人数でもできるゲームとされ、最
初のゲームは9対9でおこなわれた。しかし、
コート of 狭さから1893年に9人制と5人制が明
記され、その後1894 - 95年度にコートの大きさ
により9人、7人、5人制となり、1896 - 97年
度から今日と同じ5人制のみとなっている。
- 10) Gulick, Luther. (ed.). Spalding's Official
Basket Ball Guide, New York: American Sports
Publishing Company, 1897, p.35.
- 11) Mayer, Clarence I. "History of College
Basket Ball", A Thesis of International Young
Men's Christian Association Training School,
Springfield, Mass., 1911, p.14.
また、ドリブル・ゲームについては、ネイスミス
が「1896年(明治二九)の初めころには、別名、「ド
リブル・ゲーム」といわれるようなゲームもあっ
た。エール大学チームは、ときおり、この「ド
リブル・ゲーム」をすることがあった。」(Naismith,
James. Basketball: Its Origin and Development,
New York: Association Press, 1941, p.64.) と述
べている。
- 12) Gulick, Luther. (ed.). Spalding's Official
Basket Ball Guide, New York: American Sports
Publishing Company, 1898, p.95-96.
- 13) この提案は、Thomas J. Browneによって1899

- 年になされている。彼によれば、「他の試みは、フィールドを長くダッシュしてくる粗暴なドリブルを取り除き、パスを促進するために、フロアを分割することである。1つのフロアを3つに区画し、プレイヤーはこれらの区画に割り当てられる・・・」というものであった。(Gulick, Luther. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1899, p.21.)
- 14) Ibid., p.68.
- 15) Hepbron, Geo. T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1901, p.73.
- 16) Gulick, Luther. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1900, p.69.
- 17) Hepbron, Geo. T. op. cit., p.69.
- 18) Hepbron, George T. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1903, p.83.
- 19) _____ (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1904, p.85.
- 20) この点に関しては、次の文献が詳しいので参照されたい。
(Naismith, James. Basketball: Its Origin and Development, op. cit., p.102-107.)
- 21) Fisher, Harry A. (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1905, p.81.
- 22) Naismith, James. "Review of the Middle West Collegiate Basket Ball Season," Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, ed. Harry A. Fisher. New York: American Sports Publishing Co., 1909, p.63.
- 23) Fisher, Harry A. (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1908, p.118.
- 24) _____ (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1909, p.122.
- 25) Ibid., p.114.
- 26) _____ (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1911, p.210.
- 27) _____ (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1912, p.161-163.
- 28) _____ (ed.). Spalding's Official Collegiate Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1913, p.160.
- 29) Ball, William H., George T. Hepbron and Oswald Tower (eds.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1915, p.23.
- 30) Tower, Oswald., James B. Modesitt and George T. Hepbron (eds.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1917, p.6.
- 31) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1924, p.11.
- 32) Ibid., p.23.
- 33) _____ (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1925, p.24.
- 34) _____ (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1926, p.9.
- 35) この会議が後に「全米バスケットボール・コーチ協会」(National Association of Basketball Coaches of the United States)に発展することになる。
- 36) Tower, Oswald. "Limiting the Dribble," Spalding's Official Basket Ball Guide, ed. Oswald Tower. New York: American Sports Publishing Company, 1927, p.11.
- 37) Knudson, Thomas A. "The Evolution of Men's Amateur Basketball Rules and the Effect upon the Game," op. cit., p.284.
- 38) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1928, p.24.

- 39) Ibid., p.21-22.
- 40) _____. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1935, p. ii .
- 41) Ibid., p.13.
- 42) Tower, Oswald. (ed.). Spalding's Official Basket Ball Guide, New York: American Sports Publishing Company, 1939, p.16.
- 43) Ibid., p.13.
- 44) Tower, Oswald. (ed.). The Official Basketball Guide, New York: A. S. Barnes and Co., 1949, p.12.

受付年月日 (2023/5/16)

受理年月日 (2023/7/20)